「漱石と広島」の会 会報
第26号



小泉八雲（改造社刊「現代日本文學全集　第五十七篇」）より



夏目漱石（創藝社「漱石とその世界」より）

「夢十夜」や「文鳥」

漱石作品に八雲の影響か

夏目漱石は小泉八雲の後を追うように、八雲が教師を務めた第五高等学校（現・熊本大学）、および東京帝国大学（現・東京大学）の教職に就いたばかりか、八雲の作品、特に怪談から影響を受けたといわれる。その影響について、膨大な資料を基に今年、広島ラフカディオ・ハーンの会で発表した本会の末國和子世話人に、そのエッセンスを執筆していただいた。

（冨沢佐一＝世話人）

比較文学研究者の平川祐弘氏は、小泉八雲と夏目漱石の間に影響関係を推定出来る作品が幾つかあるとして、『子捨ての話』と『夢十夜　第三話』、『お貞の話』と『夢十夜　第一話』、『草ひばり』と『文鳥』などを挙げている。同じく池田雅之氏は、特に『子捨ての話』と『夢十夜　第三話』は「テーマが酷似していて漱石が八雲からインスピレーションを受けたのではないか」と指摘する。では、漱石はどのように八雲作品と出会ったのか。作家・雑誌編集記者矢島裕紀彦氏の『怪談と子捨ての物語』を参考に辿ってみる。

八雲の『子捨ての話』は来日後最初の著書「日本瞥見記」＝1894（明治27）年刊＝に収められた。出雲の国の持田浦の村に伝わる伝承話である。矢島氏は漱石が同書を読んでいるはずだと指摘する。漱石が東京帝国大学での講義『十八世紀英文学』の中で、当時のロンドンで男子が鬘を常用していたことに言及し、八雲にも触れているからだ。

…まず男子から申すが、第一に妙なのは彼らが自然の毛髪を立派に所有しながら、鬘を拵えて被ったことである。…何しろ日本の女の髷の様に色々の種類の発達した所を以て見ると、一時の流行は凄まじいものであつたに違いない。…鬘の種類を挙げて見ると…いくら書いても書き切れない程ある。閑があれば十八世紀の鬘と云ふ論文を書いたら可からうと思ふ位出て来る。小泉先生の髷の研究以上の仕事である…

「小泉先生の髷の研究」とは、八雲が「日本瞥見記」の中で、日本女性の髪や結い方などについて書いた部分を指す。八雲も漱石も生い立ちには共通点が多い。幼少時より両親と離別し、愛情を受けずに育ったことからくる生への不安や孤独感をひきずる辛い過去がともにあった。二人の作品に共通する子捨ての物語には、そんな背景が影響しているのかもしれない。

漱石は1904（明治37）年4月に刊行された八雲の「怪談（KWAIDAN）」の原書にも早い時期に出会っている。同年12月、門弟の皆川正禧が漱石に2冊の洋書を預け、これを仲間の野間真綱に渡してほしいと頼んだことがあった。その内の1冊が「怪談」だった。漱石は野間宛ての手紙に「皆川は…当日来て洋書を二冊僕に托して君にやつてくれろといひ置いて行つた。一冊はハーンの怪談で御蔭で之を通読した」と綴っている。

八雲の「日本瞥見記」には『子捨ての話』など怪談話4篇が、「怪談（KWAIDAN）」には『耳なし芳一』など17篇の怪奇譚などが収められている。それらは、名アシスタントとなったセツ夫人による語りを通して八雲の五感に響き、目に見えぬ新しい息吹を与えられてゴーストリー（ghostly）なものになった。八雲は東大講義録の中の『文学における超自然的なもの』で語っている。「…たとえわれわれが、幽霊をめぐる古風な物語やその理屈づけを信じないとしても、なお今日、われわれ自身が一個の幽霊にほかならず、およそ不可思議な存在であることを認めないわけにはいかない…」

一方漱石の作品にも『倫敦塔』など怪談めいた作品があり、これらも八雲の作品の影響があるかもしれない。二人に直接の影響関係がなかったとしても、日本各地には同工異局の話が広く伝わっており、二人の聞いた民話のもとを辿れば、一つの原型に行き着くのでは―と平川氏。その例として平川氏は、民俗学者野村純一氏から教示された『六部』（「昔あったてんがな」収録）という次のような話を挙げている。六部とは六十六部の略で巡礼の修行者を意味する。

昔、あったつお。ある家ね、年夜に、六部がとまった。そこん家のとっつあは、この六部が金をどうど持っていたんだが、六部を殺して

次ページへ続く

2026年（令和8年）
9月18日発行
「漱石と広島」の会